

特集

歴史と人と地域をつなぐ、 もりおか歴史文化館開館10周年。

2021年7月、もりおか歴史文化館が10周年を迎えました。盛岡市中心部に位置するミュージアム、地域の交流拠点としての役割を担う同館。開館からこれまでの経緯を振り返ると共に、今後の展望を伺いました。

「雨が降ったら 歴史館 雪が降ったら 歴史館 かんかん照りにも 歴史館 ちょっと一休みにおでつくなんせ」館長の畑中さんが示すスタンスが、10年を経てもりおか歴史文化館らしさとして定着しています

まちに開かれた ミュージアムとして

城下町盛岡の歴史や文化を紹介し、町なか観光を推進する拠点施設として開館した「もりおか歴史文化館（以下歴史館）」。旧岩手県立図書館を活用した建物にて、道ゆく人々を変わず迎えてくれます。そのコンセプトは、「もりおか歴史文化館を中心に、盛岡城跡と城下町（中心市街地）を屋外展示としてとらえ、地域に広がるミュージアムづくり、活動展開を実施すること」。2021年7月1日でちょうど開館10年の節目を迎え、歴代展覧会のポスター展や記念のオリジナルグッズも販売しています。今回は、館長として10年間を見守ってきた畑中美耶子さんのお話を聞き、スタートから現在までの軌跡を辿ります。

「7月1日のオープンは当初の予定どおり。よく晴れた日で、たくさんの方が集まってみんなで餅まきをしたのをおぼえています。震災後間もない時期でしたので、皆さんが大変な時期に本当に開館していいのかわからないのが実際の気持ちでした。でも、心配とは裏腹に市民の皆さんが本当に喜んでくださったんです」。

開館直後は名前と場所を覚えてもらうことが第一と、畑中さんは友人知人にメールや手紙を書いてオープンを知らせたそうです。同時に震災復興支援の取り組みも始まり、沿岸



建物の特徴的な屋根形状は岩手山をイメージ。棟飾りの「ふたば」は、盛岡出身の彫刻家・舟越保武氏の作品

の被災地応援の思いを表す場として、様々なイベントも行いました。そして、同年10月29日には早くも入館者10万人を達成。畑中さんをはじめスタッフ皆、ほっとしたようです。開館直後に発足した歴史館ボランティアの皆さんが積極的に活動に参加したこと、PRに努めた影響は大きく、徐々に認知度が上がっていったのだとか。

「ミュージアムだからといって難しいテーマだけではなく、わかりやすく目で見えて楽しめる企画展が続いたことも、来館者に喜んでもらう一つの理由になったのかもしれない」と畑中さんは振り返ります。

あらゆる世代が盛岡を知り まちに愛着を感じる企画の工夫

開館第1回企画展は「南部家の至宝―名品が伝える盛岡の歴史―」をテーマに、盛岡や各地方に残された南部家ゆかりの武具・甲冑や衣装、調度品、美術品などを展示。第2回

企画展は一転して「あの日あの時の盛岡―昭和レトロの世界―」をテーマに昭和30年代〜50年代の盛岡を中心に、岩手の風景やまちなみ写真などを展示。そして、第3回企画展では、同館設計者「建築家・菊竹清訓の世界―か・かた・かたち―」を開催。改めて同館の建物について紹介しました。

「建造された1967年当時、これだけ斬新な建物は盛岡では見られませんでした。盛岡で菊竹氏の設計した建造物は3つありましたが2つが既に取り壊され、今では全面改装した形で残る同館が唯一となっております。菊竹氏の仕事を紹介しその貴重さを知ること、場を継承していく思いも醸成されていくのではないのでしょうか」。

まずは南部家にまつわるもの、現代につながるまちの歴史、さらに歴史館の建物にある背景を伝え、徐々に南部家資料を紐解きながら、ストーリー性ある展示へと深化する同館



取材中にこぼれる畑中さんの盛岡弁も貴重な盛岡文化。同館を訪ね、運が良ければ柔らかな畑中さんの盛岡弁を聞くことができるかも



ミュージアムショップでは、オリジナルグッズや県内の工芸品なども販売。最近では南部のお城をめぐる「御城印」集めも人気です

の展覧会。歴史ファンだけでなく幅広い世代に興味関心を持ってもらえるよう、現在は学芸員5人で内容を練り上げ、これまでに37の展覧会を開催しました。

歴史館だからこそ、南部家藩主16人をすべて紹介

例えば、10年間で3回にわたって開催した「盛岡南部家の生き方」シリーズでは、盛岡藩の殿様一人ひとりにスポットをあて、16人の藩主すべての実像に迫っています。「それぞれのキャラクターが浮かび上がり、より地元の歴史に親しみを感じる」と子どもから大人まで好評でした。

また、盛岡だけでなく江戸や北海道とのつながりを横軸で捉えたり、その年の大河ドラマに関連づけたり、ここ数年はどう伝えるかを考えた

キャッチコピーやポスターデザインにも力を入れてきました。

収蔵する南部家資料は約6万点あり、その8割以上が文献資料。10年を経て地元住民との関わりが深まるにつれ、藩の歴史にまつわる資料寄贈の相談が増えてきたといえます。

「盛岡は旧藩士の家系も多く、まちの歴史に関わる資料を持っている方が多いようです。家財整理した際に捨てずに相談しようという意識を市民の皆さんが持つてくださることはありがたい嬉しきことです」と学芸員の小西治子さんは喜びます。

地域とつながる交流拠点

まちの中心部にある同館が担うもう一つの使命は、地域の交流拠点として機能すること。それについて畑中さんは、「この歴史館が存在することで始まったイベントも多く、そこから新しい人の流れも生まれ」と実感しています。屋外の広々としたスペースでは、震災後から被災者を応援するイベントも多数開催。盛岡秋まつり大絵巻パレードの出発地、秋の農業まつり会場など、屋外を活用した催しもすっかり定着し、同館の交流拠点としての位置付けが浸透しました。

「まちなかのミュージアムということもあり、目的のすべてをここで終えるのではなく、まちに向く出発地であり、戻ってくる場所になればいいと思っています。難しいこと

ではありますが、関わるすべての人の力によって実現できていると思っています」。

10年目の目標としていた来館200万人は、早くも昨年2月16日に達成。同館における「気軽に歴史に触れる環境づくり」が成し遂げた実績と言えます。

コロナ禍で観光客も激減する中、遠方の方も楽しんでもらえるように、YouTubeによる展覧会の展示解説にも取り組んできました。オンラインやウェブショップをうまく活用しながらも、常に鮮度の高い情報発信を心がけていきたいとのこと。

年明け2022年1月には、『盛岡藩家老席雑書』（岩手県指定有形文化財）をテーマにした企画展を開催予定です。地域に根ざす同館の視点で紹介される雑書の世界は、今の盛岡らしさの原点を知る新たな手掛かりにもなりそうです。



子どもたちが盛岡の歴史に興味を持つきっかけにすべく始まった「もりおか歴史文化館自由研究コンクール」。今年10月に第3回発表会を開催予定です